佳作賞受賞者

佳作賞
「ずんだれ」
『法螺』60号

西向　聡氏

西向　聡（にしむこ・そう）
一九三九年十一月、熊本県天草市生まれ。
大阪文学学校に通っていた一九七二年、友人ら三十余名で枚方文学の会結成。市民文学講座のあと、一九七七年『法螺』創刊。同誌の編集発行人。
二〇〇二年リストラ体験記で、第五回週刊ダイヤモンド自分史大賞優秀賞。歌集『半熟の季節』、短編集『海の柩―伊号第六十七潜水艦浮上せず―』
尚、『法螺』は大阪府地域文化振興奨励賞、第三回富士正晴全国同人雑誌賞大賞受賞。

記憶の奥にいる少年

ずんだれは見苦しい格好の意味で、「ずったれ」「じょんだれ」ともいう九州南西部の方言。尼崎で下宿していた頃、男と出奔した母をさがして、郷里から私をたずねてきた中学二年の少年がいた。彼のメモを頼りに、駅で買った神戸の地図を見ながら当時の兵庫駅か新長田駅からダラダラ坂を山手へ歩いた。古い家並の路地でアパートを見つけたものの母親は留守だった。近くの公園で待ったが、夜になってもアパートの部屋に灯はともらなかった。「どうするか」とたずねたとき、「母ちゃんが戻るまで部屋の前で待つ」といった少年の悲壮な姿が記憶の奥にある。彼は飾磨か家島で小さな海運会社をやっていると、噂に聞いた。健在なら還暦を過ぎただろう。

小説では時間・場所・状況設定をかえてフィクションにしたが、水産加工場でのアルバイトやカンニング疑惑に関する一連の出来事は、中学時代の私の実体験である。

若いときは失敗をするし、挫折もある。思い通りにならないことばかりだ。しかし、人は現実のきびしさ、ほろ苦さに人生を学び、成長していくのではないだろうか。私は生きる術に不器用だから、糞まじめに汗を流し、辛抱できるまで耐え、自分を信じて進むしかないけれど、泥臭く拙い小説も同人誌活動も、基底はヒューマニティ（人間性）だと思っている。

同人誌創刊の頃、小野十三郎氏から「草の根の文学拠点をめざせ」といわれ、八橋一郎氏から「同人費や掲載料をハッキリ規定し、絶対に赤字を出すな。急場しのぎのカンパに頼るな」とアドバイスをうけた。『法螺』では創刊間もない時期から、規定の原稿用紙で何枚書けば負担金がいくらになるかを明記している。これには外部から異論もあったが、同人誌は自腹を切って出す。命取りになりかねない金の問題は開示する、のが私の信条である。

沢山ある文学賞のなかには「応募資格　不問」と明記しながら、六十歳以上乃至六十五歳以上の応募原稿は中身を読まずにゴミ箱直行、との噂をときおり耳にする。事実とすれば傲慢である。

その点、神戸エルマール文学賞は作品本位に選考されるという。熟年が多い同人誌の書き手には励みになる賞ではないだろうか。関係者の労に感謝申し上げたい。

第三回神戸エルマール文学賞

第三回総会（基金会員・維持会員で構成）
受賞を祝う会　御案内

日時　二〇〇九年十月十二日（月曜日）
　　総　会　十二時三十分から
　　祝う会　十三時三十分から
場所　ラッセホール　二階
　　神戸市中央区中山手通4―10―8
　　電話078・291・1117
会費　八千円

お問い合わせ・事務局：三田地　智方（TEL078・882・1638　FAX078・882・1630）